

新年を迎えて —— 鎖国状態や患者の楽園からの脱却の兆しを見る

内山 充

新しい年を迎えました。この知識社会において、多くの人びとが、健康で健全な社会の発展に貢献し、かつそこから受益できるように日々努力しています。薬剤師も、時代の流れを認識し正しい判断に基づいて、自らの職責を果たさなければなりません。

薬剤師の職責が、薬剤師専門職能の向上とその活用による社会貢献、ならびに薬剤師業務への信頼を得ることであるという考えは浸透しつつあります。そして、職能向上のためには生涯学習の役割が重要であることもかなり広く認識されてきました。

ところで、わが国で薬剤師生涯学習が組織的に取り上げられてから、すでに 20 年を超えますが、それが真に社会に役立ち、必要な効果をもたらすためには、体制の整備や制度の運営の上でまだ改善すべき多くの課題が残されています。しかしながら、昨年から今年にかけて、あたかも幕末から明治維新を迎えるような、大きな変化の胎動が感じられるような気がします。大げさな表現だとお叱りを受けるかもしれませんが、それは、生涯学習の本来あるべき体制構築に支障をもたらしていた幾つかの課題が、解決されると期待できる動きが次々に出て来たからです。

第 1 に、薬学専門職であるわれわれの、知識の拠り所である日本薬学会が、薬剤師生涯学習に多大の関心をもって大きく舵を切ったことです。

これまで、わが国の薬剤師生涯学習の体制は、何となく基礎学問と隔絶したような立場にありました。また、他の医療職や、先進諸国の薬剤師の間では、どのような学習体制あるいは学習目標や方法論が設定され論議されているかなどに関して、広く検討することなく、古い前例や慣習に捉われた制度を頑なに維持しているところもあり、長い間『鎖国状態』にあったと言えます。それが、昨年度より会頭の主導のもと、まず部会活動として「生涯学習部門」が発足し、昨年末にはシンポジウムが開かれ熱心な討議がなされました。さらに今年度からは、独立した「教育委員会」を設立して、国際的にも通用する近代的な生涯学習体制を学会としても推進すべく、組織活動を開始されるとのことです。

第 2 に、日本薬剤師会や日本病院薬剤師会のような大きな職域団体の中で、分野ごと、職域ごと、あるいは地域単位で、それぞれ生涯研修の核となる研修・認定制度を、自主・自律的に企画する新しい動きが出てきたことです。残念なことに、わが国では昔から、大きな組織の中で、一部の者が先見性や独自性を発揮しようとする、周囲が必ず足を引っ張り全体のレベルにまで落とそうとする傾向が見られました。それにより、社会は和を尊び平和になるでしょうが、進歩の無い『患者の楽園』となる（梅原猛氏）といわれます。薬剤師生涯学習に関しても、過去、新しい芽が摘まれた例が見られます。今後は、このようなことは決して起こしてはなりません。

この 2 つの動きに、私は薬剤師生涯学習新時代の黎明を感じます。

年頭に当たり、当薬剤師認定制度認証機構は、正しい目的意識と国際感覚のもと、「非営利」と「公開」という公益性の基本に則り、志を同じくする良識ある多くの方々とともに、質の高い生涯学習実施機関の育成・認証、ならびに適正な研修・認定制度の体制整備の努力を続けたいと、改めて覚悟を新たにいたしました。

(2011. 1. 4)